

近代フランスにおける子ども服と男らしさ

新實 五穂*

Children's Costume and Masculinity in Modern France

Iho NIIMI

Abstract

This article aims to consider symbolism related to the act of wearing robes or skirts by boys and the initial act of wearing culottes or pantaloons by individuals by using 19th century French books on childcare, children's books, and magazine articles. An examination of the use of the "first culottes or pantaloons" reveals a rite of passage to create masculinity and the preparation period for a boy to transition into becoming an adult man.

The initial act of wearing culottes or pantaloons by an individual indicates that the boy is acting based on his own judgement alone as well as that he establishes his independence. Therefore, while culottes or pantaloons are essential items of clothing in the growth process for boys who want to become independent, they are considered unnecessary for girls who do not want to be seen subjectively. Additionally, the "first culottes or pantaloons" bring to mind the aspect of the boys' fierce mindfulness of their fathers, such as when they leave their mothers and begin learning masculinity from their fathers.

Keywords: France, 19th century, Children's costume, Culotte, Pantaloons

1 はじめに

中世から18世紀までのフランスにおける子ども服に関しては、歴史家フィリップ・アリエスの著作『アンシャン・レジーム期の子どもと家族生活』の中で、産着を経た後の子どもたちがどのような服装をしていたのかが既に明らかとなっている¹。それによれば、女兒は成人女性のミニチュアのような装いをするのに対し、貴族の家系やブルジョア家庭に誕生した男児は16世紀頃から第一次世界大戦後まで、ローブ（ドレス）を身に着ける慣習があったとされる。そして母親や乳母、使用人の手から離れる5歳から6歳頃まで男児のローブ姿は続き、男性による教育が開始されたり、学校に通うようになるなどして、7歳頃に男児のローブ姿は終焉を迎えると指摘されている。また服飾史家エリザベス・ユウイングおよび彼女の著作を邦訳した能澤慧子は、イギリスを中心としたヨーロッパの乳幼児が年齢に応じて着用する衣類をより詳細に説明している²。誕生から生後6カ月～生後8カ月頃までがスワドリング（産着）で、その後、1歳半～2歳半頃までが足首までを覆う長い丈のワンピースドレス、そして三番目の装いに移る際、性による区別が始まるとされる。女兒は成人女性と同様の服装になる一方、1歳半～2歳半頃から5歳～7歳頃まで、男児は上半身が成人男性と同様の上着に下半身がスカートというように、大人にはなりきらない、性も曖昧な段階としての服装になると言われる。なお男児は、6歳頃にスカートやペチコート脱いでブリーチ（半ズボン）を着用する儀式「ブリーチング」を経験し、ズボンを穿き始めるとされる³。ただし、男児がローブやジュツ

キーワード：フランス、19世紀、子ども服、ズボン

* お茶の水女子大学基幹研究院人文科学系 助教

プ(スカート)を経てズボンを穿き始める時期は3歳頃から7歳頃までと幅があり、諸説が存在している。さらに男児と女児のものとは、ローブの開きや装飾、色調に差異があり、厳密には同じデザインではないとする指摘がある⁴。このように未だ不明瞭な部分は少なからずあるものの、アリエスが主張するように、大人になるまでのある一定期間、成人とは異なる幼児に特有な恰好を男性のみがする行為は、まず男児に限定して子ども期の意識が生まれたことの表れであろう⁵。

では、なぜ貴族やブルジョア家庭の男児は子ども期にローブを着用したのだろうか。その理由については、実利的な面からも、象徴的な面からも、さまざまなことが指摘されている⁶。前者の実利的な面は、転倒時に脚を保護する目的や脚の露出が身体に悪く、自然な成長を妨げると考えられていたこと、さらにはおしめの交換や排泄の世話のしやすさなどが挙げられる。とりわけ排泄物の処理については、床や地面に落ちた排泄物を掃除する方が衣類の洗濯を頻繁にするよりも手間がかからないため、股下が開いた形状であるローブが適していたと言われている⁷。先述した理由に、子どもは6歳の頃まで女性の庇護下で主に養育されてきたことも関係するとされる。後者の象徴的な面は、中世の男女に共通する装いであったワンピース形式の衣服への復古主義・懐古趣味、あるいは修道士や農夫、羊飼いや下層の民衆と類似した装いであることから階級意識を伴う仮装趣味とも考えられている⁸。とくに階級意識については、子どもの周囲には悪霊が飛んでいるという信仰があるほど死亡率が高かった乳幼児の弱さや無力さ、頼りなさが社会の中で身分が低く立場の弱いマージナルな人々と結び付けられ、その類縁性が服装上で可視的になったのではないかと推察されている。また男児にローブやジュップの着用が勧められた理由の一つとして、歴史家イヴァン・ジャブロンカが強調しているように、早熟に対する危険性が近代フランス社会で繰り返し唱えられたことも無視できない⁹。

ゆえに本論文では、アリエスが詳述していない19世紀のフランスを取り上げ、男児によるローブあるいはジュップの着用が推奨された社会的・文化的背景の一端を踏まえながら、ローブやジュップを脱いで初めてキュロット(半ズボン)やパンタロン(長ズボン)を穿く行為にまつわる象徴性について、当時の育児書や児童書、雑誌記事などを用いて考察することを目的とする。そして「初めてのズボン」という着衣行為の存在は知られてはいるものの、この行為にどのようなシンボリックな意味が込められてきたかはほとんど検討されていないため、本論では「初めてのズボン」が成人男性としての男らしさを創出し、構築していくために必要な通過儀礼であったことを明らかにしたい。

2 育児書『幼年時代と青少年期の管理者』

先にも述べたように、ジャブロンカの論考「男らしさへの旅」としての子ども時代」の中で、19世紀の医師や聖職者の多くが男児の早熟な性的欲望を禁止すべきものと考え、自慰の有害性について警告をしていたことが明確にされている¹⁰。というのも、1760年にスイスの医師サミュエル＝オーギュスト・ティソが著した『オナニズム マスターベーションによって引き起こされる疾病論』に基づき、幼い男児による自慰行為は消耗・衰弱・不調・過労・墮落の原因につながり、身体の健全な発育および男らしい肉体の発達を阻害するため、無数の悲劇的結末や危険性を呼び起こすものと見なされたからである。本節では、ジャブロンカが言及している、パリのパレ・ロワイヤルにあるドロネー社から1825年に刊行された育児書『幼年時代と青少年期の管理者』¹¹に着目し、男児の自慰行為と服装との関係について詳しく触れておきたい。

フルタイトルが『幼年時代と青少年期の管理者、すなわち新生児から思春期の年齢までの子どもたちを育てる上で見習うべき原則』であるように、同書には両親の影響が子どもに強く働くとされる時期、つまり誕生から14歳までの子どもを対象にして育児において両親や使用人が気をつけるべき事柄が記されている。さらに同書は、プロイセン国王の最初の侍医であるC.F.フーフェラントが1824年に刊行した著作『人間の寿命を引き延ばすための技法』をより深く掘り下げた内容になっていると謳われている¹²。51頁ほどの小冊子ではあるものの、創意工夫に富んだ母性愛による世話が子どもの寿命や身体能力、知能に影響を与える事実を明示することが、同書の刊行目的である。そして同書の構成は、「概説」・「人間の寿命」・

「最初の時期（誕生から7歳まで）に子どもの育成に関して従うべき規則」・「最初の時期の食生活」・「肌の手入れ」・「自慰」・「二番目の時期（7歳から14歳まで）」・「未婚女性の思春期」となっており、中でも「自慰」の項目は7頁にわたって記述されている¹³。なお、「自慰」の項目がこの位置に置かれている理由として、自慰行為は子どもたちのほぼ全ての年齢において表面化するものであるが、人間の身体が大きく成長する7歳から14歳頃という「二番目の時期」の前に自慰の項目内容を扱いたかったからであるとされている。

同項目では、その冒頭から、未熟な年齢での病気や致命的な奇癖を進展させてしまうものこそが自慰（オナニズム）であり、母親が予防しないといけない行為であることが指摘されている。そして多くの子どもたちが幼い時期に命を落としたり、身体が虚弱なまま肉体が疲れ果てた状態で生活し続けることになったり、理性や倫理観を失って不幸な一生を背負うことになるため、男児の自慰行為は避けなければいけない振る舞いであると強調されている。さらに生殖器官への影響は、出不精な生活態度および過度な興奮によって一般に引き起こされ、それらを子どもから回避させるのは勿論、子どもをよりよく監督し、見守ることで自慰行為は減少するとされる。その上で、同書は子どもの養育や世話において注意すべき点を6項目挙げています。一つ目は食生活に関することで、乳離れをした子どもには香辛料が入っていたり、身体を熱くさせる性質の食品は与えないようにすること。二つ目は入浴や装いに関すること。三つ目は姿勢や睡眠に関することで、身体を非常に熱くさせる危険があるので、子どもを長時間座らせ続けてはならず、これはベッドの上でも同様であること、さらには眠る前には子どもを十分疲れさせて、添い寝はせず、寝具で覆い過ぎて身体が熱くならないように保つこと。四つ目は、両親や周囲の人々が子どもの知的能力を発達させるための時間を採し求めないこと。五つ目は過度な心配から発言や行動を監視する必要はないものの、異なる性別の子どもたちが自ら一緒にいないように見張ること。六つ目は先述した事項を守るため、使用人に完全に任せるのではなく、子どもの監視人を自分自身で見張る必要があること。上記の中でも、とりわけ興味深い項目は二番目のもので、子どもの入浴や装いについて次のように述べられている。

子どもたちは毎日、冷水で洗い続けなければならない、一週間に一度は入浴をさせなければならない。そして入浴時間は15分から30分までの長さで少しずつ延長していかなければならない。子どもたちは何にもまして自然の状態で、あまり覆い過ぎてはならない。動作を邪魔されず、擦れて官能を呼び覚まさないため、衣服は大きめのものが良い。このような理由により、数年の間、男の子にはジュップを身に着けさせることが適している。その間、この恰好に対して使用人が罵り嘲ることを禁じておくべきである¹⁴。

自慰を防ぐ目的で、子どもの身体を熱くさせないための工夫が食生活や睡眠、入浴、装いなどの観点から主張されている。また服装においては、身体を覆い過ぎないことや、身体を締め付けないために開放感のある大きめの衣類が幼児にはふさわしいとされ、とくに男児には性的欲望を早くに目覚めさせ、自慰行為に至らせないためにも、ジュップを着用する必要性が説かれている。つまり近代フランス社会において、男児のジュップは、性的欲望を時期尚早に意識して、未熟な身体のまま成長し、その身体で成人男性としての男らしさを体現しないための予防措置であったと言える。このような育児書の記述を通して、男児がローブやジュップを着用する行為は、男児が長い丈の衣類を着用する行為によって幼少期を明確に形作った古風な慣習というだけにはとどまらない、慣例に後付けされた社会的な規範があることを推察させる。

3 「初めてのズボン」をめぐる表象

それでは、男児がローブやジュップを脱ぎ捨て、初めてキュロットやパンタロンを着用する行為には、どのようなシンボリックな意味が込められているのであろうか。1891年の子ども向け週刊誌『ラ・ガゼッ

ト・デ・ザンファン』¹⁵に掲載された版画には、ジャックという男児が生まれて初めてキュロットを穿く様子が描かれるとともに（図1）、次のような文章が添えられている。

今日、ジャックは初めてキュロットを穿く。ローブを脱いだ。ルダンゴト（紳士用の上着）はいつ着るのか。彼の新しい服装は皆の目を魅了する！嘲るものなどいない。今や一人前の男だ。今後、どこでも彼を「ジャック氏」と呼ばずには済むまい。そのことは彼を誇り高く、陽気な姿にさせる！¹⁶



図1 『ラ・ガゼット・デ・ザンファン』 1891年 20号 5頁
フランス国立図書館 LLA-4-Z-1006

この場合、ジャックは初めてのキュロット着用によって、乳幼児の扱いを抜け出し、成人男性の世界に足を踏み出すことになった結果、周囲の人々が彼を一人前の男性として歓迎するとともに、彼自身もその事実を誇らしく、嬉しく思う姿が記されている。換言するならば、成人になる準備を整え、成人男性の一員として自身を周囲に意識させ、認めさせることがズボンを穿く行為には包含されているのである。ここで、男児が初めてズボンを穿く行為を取り巻く表象がいかなるものであったかについてより理解するため、19世紀中・後期の三つの作品を取り上げ、具体的な描写に触れておきたい。

3.1 エッセイ集『ムッシュ、マダム、ベベ』

1866年に刊行された『ムッシュ、マダム、ベベ』は、画家で作家でもあったギュスターブ・ドロー（Gustave Droz, 1832-95）の小論を集成した作品集である。同作品は1880年代に既に100版以上の増刷を重ね、ドローの名前をヨーロッパやアメリカで有名にした作品として知られている。さらに1878年には、パリのサン＝ジェルマン大通り175番地のヴィクトル・アパール社から、画家エドモン・モラン（Edmond Morin, 1824-82）による挿絵入りのものが出版されている。『ムッシュ、マダム、ベベ』は夫婦や家族に関する30ほどの小論から成り、とくに注目したいのが、「初めてのキュロット」というタイトルの8頁の作品である。1878年版の「初めてのキュロット」では男児が誇らしげにキュロットを穿く挿絵とともに、初めてのキュロット着用をめぐる両親の姿が以下のように描き出されている。

子どもにとって、大きな望みは一人前の男になること。ときに、人生における男らしさの最初の兆しや確かな初めての一步は、キュロットの使用によって特徴づけられる。

この初めてのキュロットとは、父は望み、母が危惧する出来事である。母にとっては捨てられた状態が始まるように思われる。彼女は涙にぬれた眼で永久に放棄されたコティヨン（ペチコート）を見つめて、次のように考える。「乳幼児期がまさか終わるのかしら？もう！私の役目は間もなく終わりを迎えるだろう。彼は新たな嗜好や欲望を持つでしょう。もはや既に彼は私自身ではなく、彼の自我が目立ち、大した人物、そう少年です。」

反対に、父は有頂天で、にこやかに笑う。パンタロンから出ている弓形に反った小さなふくらはぎを目にしなが。そして新しい服装によってはっきりと形を見分けることができるこの小さな身体を触って、次のように言う。「何とがっちりして丈夫な！私のように肩も大きく、腰も安定するだろう。小さな足で地面の上にしっかりと立っている！…」¹⁷

男児が初めてキュロットを着用する行為により、子どもの自我が確立していくこととともに、母親による養育が終わり、母親は自身の分身のように感じていた息子が自分から離れていき、打ち捨てられたようなもの悲しさを感じる様子が記されている。さらに母親のことばからは、乳幼児期と少年期とが区別されていることがうかがえる。他方で、父親は子どもの発育や成長を手放して喜び、自身の分身である小さな存在としての男児を認識し始める。「新たな目で（男児と）向き合い、初めて「ねえ、君」と呼びかけることにこの上もない魅力を見つける」¹⁸という契機が、父親にとっての男児が初めてキュロットを着用する行為となる。要するに、母親が子離れと向き合い、父親が子どもを小さな男性として認め、子育てに参与していく機会を痛感する局面こそが、初めてのズボンという子どもの成長段階における通過儀礼であると言えよう。

他方で、「ベベ（ひよっこ）」と称される男児が初めてキュロットを身に着けた際の様子に関しては、キュロットそのものを愛しく嬉しく思いながらも、男児の恰好にはどこかぎこちなさが残り、不自然な物腰であることが次のように綴られている。

ベベはどうかと言うと、腕や脚を少し塞がれても、陶醉し、自尊心のある得意げな様子である。こう言うは何だが、夏が近づき剪毛された小さなブードルにかなり似ている。気の毒な小さな男性を大変不快にさせるもの、それは過去の出来事である。一何と多くの生真面目な男性たちが同じような不都合に遭遇してきたことか！キュロットが今や新しい物腰や動作、声色を強いてくるのを非常に感じるのだ。ベベはパパの動きを横目で盗み見し始め、パパはそれに満足し、ベベは男らしい動作を不器用に試みる。そしてこの過去と現在の対立が、わずかな期間、世の中で最も滑稽な奔走をベベにさせることになる。コティヨンが付きまとい、ベベは本当にひどく悔しがるのである¹⁹。

男児は長らくコティヨン、すなわちスカート状の下着を指すペチコートを身に着ける生活を送ってきたため、キュロットを穿いたことによって強いられる立ち居振る舞いに慣れておらず、それがおどけた仕草を生じさせる場面がしばしば存在する。しかしながら、父親の振る舞いを手本として、見よう見まねで男らしさを獲得しようと努力する。男らしい物腰や動作、声色を意識して、男性としての務めを開始することがキュロットを初めて穿く行為には付随している。これらのような、『ムッシュ、マダム、ベベ』の「初めてのキュロット」において見られる自我の確立および父親との関係性の構築、男らしさの産出といった主題は、次に取り上げる作品でも確認できるものである。

3.2 モノローグ『初めてのパンタロン』

『初めてのパンタロン、少年のモノローグ』は1887年に、パリのグラモン通り14番地にあるテアトル社から刊行された。50サンチームで販売されたこの作品は、文人のポール・ボノム（Paul Bonhomme, 1861-1919）が執筆した独演劇である。初めてズボンを着用し、喜ぶ男児の姿や誇らしげな様子が集約され

ているため、少し長くはなるが、以下に同作品の全文訳を引用しておきたい。

僕だってもうわからない...ご覧！キュロットを穿くために、女の子のローブを脱いだ！僕は幸せ者だ、好みのパンタロン、これでパパとそっくりになる！両方とも同じ毛織物でできているから！

僕のサイズに合ったもの、わざわざ僕のために！パリの仕立屋で、一番良い毛織物でできているに違いない...ローブの布地のようにつまらぬものではない...いや！初めてのパンタロンは僕を王子のように美しくさせる！

ローブ、産着を感じさせる...滑稽で見苦しい...女の子のように見えてしまう...少しも男らしくない...見たら、僕は笑い出して逃げ出すよ...まったくよく言ったように、パンタロンと同じ値打ちはない！

パンタロン！それを穿くのは男だけだろ？僕が子どもだって、男の真似をしたい...まず厳かな身なり、それは落ち着きさえも与えてくれる...パンタロンを穿けば、僕は勇敢そうだ！

兵隊をご覧、身体にぴったりのパンタロンに、地面に鳴り響く拍車！過ぎ去っても、何て誇り高い！この見事な物腰を見たことある？でも、僕は似ているよ...パンタロンを穿いたら、ほとんど同じ見た目だよ...

これからは、道端で手を引いてもらわなくていい...自分一人で歩いて行っていい、男みたいに...だって、僕にはそれだけの値打ちがあると思う...それにパンタロンを穿いたら、一人前の男じゃないのか？

それに知っているかい？パパみたいにポケットが二つある...対をなして...中にもものを入れるため、鞆のように奥行きがある...これらは穴があいた美しいつり革で留められている...まったく何て素晴らしい発明なんだ、パンタロンは！

僕がよくそう思っているように、これらはそれほど重要なことではなく、より魅力的な別の話もあったかもしれない...「とても長い話をするのも、ちっとも苦ではない、何を初めて使うかを知るために...初めてのパンタロンを...」

でも何を望む？僕の年頃だと読んだり数えたりできても、幼い子のように僕は何も語ることができない、政治に携わること、あるいはサロンで展覧していることについて...—僕は初めてパンタロンを穿くという素晴らしい手を手に入れた！²⁰

男児がキュロットやパンタロンを穿くことによって、一人前の男になる喜びは勿論、父親という最も身近な成人男性と素材やデザインの面でもよく似た恰好になる嬉しさが綴られている。自分のために仕立てられ、父親のものと同じ毛織物で、奥行きが深い二つのポケットや美しい吊り革が付いたパンタロンは、自分一人で何かができ、厳かさ・落ち着き・勇敢さを付与してくれるものである。それに相対するかのような存在であるローブは、産着として幼さや未熟さを想起させるものである上、女性が着続けるものであるがゆえに男らしさがなく、滑稽で見苦しいためにパンタロンと同じ価値はないと位置づけられる。このように「初めてのズボン」には、比較化や相対化されることで、女性服(ローブ)および女性への蔑視も付随する。

たとえ、成人男性と同等に政治や芸術などについて語れないほどの若い年齢であっても、男児がローブを脱いで初めてパンタロンを穿く行為には、男らしさというものを自分なりにイメージするための装置の役割が負わされているのではないだろうか。また男児が父親と同じデザインの服飾を身にまとう行為を通して、装いや外見の上で父親との共通点や結びつきを確認し、成人男性として父親が備えている振る舞いや性質を手に入れる準備ができた者として、男児が父親との関係性を見つめ直し、絆を明確に意識する役目も負わされていると言えよう。

3.3 子ども向け小説『初めての犬と初めてのパンタロン』

両親はほぼ不在で作中にはほとんど登場しないものの、母親代わりの姉マリーに見守られながら、弟ジュ

ジュールが成長していく過程を描いた一連の物語を19世紀の編集者で出版人であるピエール・ジュール・エッツエル (Pierre-Jules Hetzel, 1814-86) が刊行している。この児童書「ジュジュール君」のシリーズはエッツエルの息子ルイ＝ジュールがモデルになり、誕生したとされている²¹。その中の一つにあたる『初めての犬と初めてのパンタロン』は1881年に初版が発行され、エッツエルがP.J.スタールというペンネームで記した作品とされる。パリのエッツエル書店から出版された同作品には、デンマークの画家で版画家のロレンツ・フルリック (Lorenz Frølich, 1820-1908) による木口木版の挿絵が添えられている(図2)。また同作品では、しっかり者の姉とまだ頼りない弟が犬を飼い始め、二人で世話をする話とともに、子どもの成長を意味する「初めてのズボン」の日をめぐる男児の気持ちが詳しく描かれていると指摘されている²²。そして自我の確立という観点では、パンタロンを穿く前と穿いた後とで、男児が大きな行動の変化を見せる話の展開が興味深い点として挙げられよう。



図2 P.-J.スタール『初めての犬と初めてのパンタロン』 1880年 見開き扉

フランス国立図書館 ark:/12148/bpt6k6578002n

(<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k6578002n/f6.item.r=premier%20pantalon> 2018年3月6日アクセス)

22の場面からなる物語の中で、犬を飼い慣らし、立派な主人となっていくマリーに対して、上手く犬の世話や躾ができないでいるジュジュールがある日、野良犬にかまれるという出来事が起こる。マリーがすぐさま野良犬を追いかけて、ジュジュールの小児用ブラウス(ブルーズ)に穴が開いてしまった際、以下のような会話が姉弟で交わされる。

—姉は弟に次のように言った。「幸運にも、あなたはまだキュロットを穿いていない。ゆったりとした服ではない、パンタロンでは犬から逃れられず、犬の牙を感じるようになったでしょう…」

—ジュジュール氏はマリーに次のように応じた。「それでもなお、僕はキュロットを穿きたいのです。キュロットを穿けば、大人になった、一人前の男でしょ。犬はあなたを怖がっている。一体いつ作られるの、僕のキュロットは？」

—マリーは彼に「勿論、間もなくよ」と答えた²³。

以来、ジュジュールはパンタロンの着用を望み、遂に初めてのパンタロンを身に着けると、少し窮屈で不快に感じながらも、非常に満足する。しかし、マリーが引く荷車に乗って散歩に出かけた際、彼がパンタロンを見せるために歩きたいと荷車から一人で降りようとした結果、雨上がりのぬかるんだ道の上に転び、ブラウスやパンタロンをぐちゃぐちゃに汚してしまう。この失敗を弟は泣いて後悔し、姉は彼に注意深く行動することを諭した後、彼は修繕されたパンタロンを再び穿き始める。物語の最後では、自分一人でもできるようになったジュジュールの姿が次のように描かれる。それは、まさしく「キュロットを穿けば、大人になった、一人前の男でしょ」という彼のことば通りに、成長を果たした姿であった。

パンタロンを穿いて以来、ジュジュール氏はもはや怖いもの知らずで、次のように言い張る。自分一人で扉を開けられ、食品戸棚に葡萄ジャムの瓶を自分で元に戻すことができた。実際、それは真実である。ああ！彼の教育には無駄骨を折った²⁴。

姉が弟の面倒を細々と見て、褒めることで弟を育て上げていく一方、初めてのパンタロン着用という機会を経て、自身の判断で行動するようになる弟の様子が記されている。パンタロンを着用するようになっても、ただちには成人男性のように上手く振る舞えず、失敗してしまうという物語のあらすじは、他の作品にも垣間見られる要素である。さらに膝丈の小児用ブラウスの裾をたくし上げ、ボタンを留めて下半身にパンタロンを穿くジュジュールの挿絵（図3）には、「ジュジュール氏はパパのような一人前の男になるでしょう」²⁵という一文が添えられている。同作品の中に父親は一度も登場しないものの、父親の存在をパンタロンからほのめかす点は、他の作品とも通底する意識である。



図3 P.-J.スーール『初めての犬と初めてのパンタロン』 1880年 XIII

フランス国立図書館 ark:/12148/bpt6k6578002n

(<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k6578002n/f33.item.r=premier%20pantalon> 2018年3月6日アクセス)

以上の三つの作品を通して理解できるように、初めてのズボン着用は、男児が試行錯誤を繰り返しながら自分なりの判断に基づき一人で行動するという「男らしい」行為を意識し、男らしさを模倣し始める契機である。そしてとりわけ父親との関係性を新たに認識し、成長段階において男同士の絆を結び、確認す

るための儀式としての意味合いが込められているのではないだろうか。

4 おわりに

そもそも、すべての子どもが産着としてのローブやジュップを着用していたという前提を考慮すると、成長段階に応じて男児のみに衣服の形状が変化する場面が設けられており、それは女児には不必要な変化であると見なされていたことになる。成長した証左である「初めてのズボン」が表象するものの一つとして、男児が自分なりの判断に基づき一人で行動することが含まれる以上、従属的な存在から主体的な存在になったことへの証が、初めてズボンを穿くという行為に該当する。それゆえ、主体性が望まれる男児には成長過程において必須の段階的な服装であるものの、主体性が望まれないきらいのある女児には不要な着衣行為であったと考えられる。また「初めてのズボン」は、母親の手元から離れ、男らしさを自分に最も身近な成人男性である父親を手本として学び始めるといった、父親を強烈に意識するある種の儀礼的な側面を保持している。つまり、男児が男らしさを獲得するためには、父親をロールモデルとすることが必須という意識づけが行われる。ある程度の年齢に到達したら、男らしさを生み出し、築き上げていくために、母親が身に着けているローブやジュップから離れ、父親が身に着けているキュロットやパンタロンを着用することで、男性性というものを改めて強固に認識し、一人前の成人男性となるべく性を装わなければならない。そこには、男性性を獲得する者が未熟で幼稚な身体であってはならないため、社会規範に基づいてさまざまな着衣する理由が後付けされてきたのであろう。

本論文では近代フランスの子ども服における男らしさを考察する上で、「初めてのズボン」をめぐる表象を取り上げ、この着衣行為にどのようなシンボリックな意味が込められていたかの一側面を明確にすることができた。今後、同時代の育児書や子ども向け新聞・雑誌などをはじめとする文献・図像資料の調査対象を拡大し、実証的な分析をさらに進め、子ども服における社会表象についてより明らかにしていきたい。

本研究は、平成30年度公益信託家政学助成基金の助成による研究課題「近代フランスにおける子ども服とジェンダー—男らしさの表象をめぐる—」の研究成果の一部である。

注

¹ フィリップ・アリエス『〈子供〉の誕生—アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』杉山光信、杉山恵美子訳、みすず書房、1980年。

² エリザベス・ユウイング『こども服の歴史』能澤慧子、杉浦悦子訳、東京堂出版、2016年；能澤慧子「ヨーロッパの子どもの服装抄史—子どもへの眼差しの表象として」、『こどもとファッション—小さい人々への眼差し』、島根県立石見美術館、神戸ファッション美術館、東京都庭園美術館、2016年、11頁。

³ 前掲書『こども服の歴史』、29-32頁。

⁴ Noreen Marshall, *Dictionary of Children's Clothes 1700s to Present*, London, V&A Publishing, 2008, p.23; Claude Fauque, *Quand les vêtements racontent l'enfance*, Arles, Éditions du Rouergue, 2017, p.56.

⁵ 前掲書『〈子供〉の誕生』、57-58頁、60頁。

⁶ 前掲書以外では、以下の論考に詳しい。アニタ・ショルシュ『絵でよむ子どもの社会史—ヨーロッパとアメリカ—中世から近代へ』北本正章訳、新曜社、1992年；モリー・ハリスン『こどもの歴史』藤森和子訳、法政大学出版局、1996年；エリカ・ラングミュア『「子供」の図像学』高橋裕子訳、東洋書林、2008年；高橋裕子「子供から大人へ—美術に見る境界の移動」、『化粧文化』25号、ポーラ文化研究所、1991年、15-30頁；松尾量子「16世紀から17世紀における英国の子供の装い」、『山口県立大学生生活科学部研究報告』24巻、山口県立大学、1998年、41-48頁；湯

沢康晴「ドレスを着た男の子」、『盛岡大学紀要』32 巻、盛岡大学、2015 年、29-39 頁; Musée de la Mode et du Costume, *Modes Infantines 1750-1950*, Paris, Palais Galliera, 1979; Marie Simon, *La Mode Infantine*, Paris, Éditions de Chêne, 1999; Musée Galliera, *La Mode et l'Enfant 1780...2000*, Paris, Éditions des musées de la Ville de Paris, 2001, Catherine Rollet, *Les Enfants au XIXe siècle*, Paris, Hachette Littératures, 2001; Denis Bruna, *Tenue correcte exigée! Quand le vêtement fait scandale*, Paris, Musée des Arts décoratifs, 2016.

⁷ Claude Fauque, *op.cit.*, p.54.

⁸ 前掲書『〈子供〉の誕生』、57-58 頁; 前掲書『「子供」の図像学』、48-49 頁。

⁹ イヴァン・ジャブロンカ「「男らしさへの旅」としての子ども時代」、『男らしさの歴史 II 男らしさの勝利—19 世紀』小倉孝誠監訳、藤原書店、2017 年、54-90 頁。

¹⁰ 前掲書『男らしさの歴史 II』、78-85 頁。

¹¹ *Le Conservateur de l'enfance et de la jeunesse, ou principes à suivre dans la manière d'élever les enfants depuis leur naissance jusqu'à l'âge de puberté*, Paris, Chez Delaunay, Libraire, 1825.

¹² *Ibid.*, p.8.

¹³ *Ibid.*, pp.37-43.

¹⁴ *Ibid.*, p.40.

¹⁵ 1890 年代初頭の同誌は表紙・裏表紙（塗り絵の場合もあり）・見開き 1 頁がカラー頁から成る全 8 頁の構成で、フランスでは 1 号が 0.15 サンチーム、3 か月で 2 フラン、6 か月で 3.5 フラン、1 年で 6 フランの価格で予約購読されていた。

¹⁶ *La Gazette des enfants*, Numéro 20, 1891, p.5.

¹⁷ Droz G., *Monsieur, Madame et Bébé, 1866*, éd.illustrée par Édmond Morin, Paris, Victor Havard, 1878, pp.385-386.

¹⁸ *Ibid.*, p.386.

¹⁹ *Ibid.*, pp.386-387.

²⁰ Paul Bonhomme, *Le Premier pantalon Monologue pour jeune garçon*, Paris, Librairie théâtrale, 1887, pp.3-6.

²¹ 鹿島茂『鹿島茂コレクション フランス絵本の世界』、青幻舎、2017 年、60 頁。「ジュジュール・シリーズ」以外にも「リリちゃん・シリーズ」や「パパ・シリーズ」など、子どもに向けた簡単なことばで、子どもたちの日常生活を描いた一連の物語は「アルバム・スタール」と称されている。

²² 前掲書『鹿島茂コレクション フランス絵本の世界』、61 頁。鹿島によれば、歩き始めた子どもはおむつが取れる 4 歳頃まで男女ともワンピースのような幼児服を着て、5 歳頃になって男児はキュロットを穿き、上着を与えられるとされる。

²³ P.-J. Stahl, *Le Premier chien et le Premier pantalon*, Paris, Bibliothèque d'éducation et de récréation, 1880, p.IX.

²⁴ *Ibid.*, p.XXII.

²⁵ *Ibid.*, p.XIII.